円城寺天井画の復元に取り組んで

調査研究係　　松田　和子

円城寺について

岡山県加賀郡吉備中央町は吉備高原の一角にある町で、県のほぼ中央部にあたり、岡山県の臍とも呼ばれている。国道４２９号線を旧加茂川町の役場があった下加茂から北上すること約六キロ、「円城道の駅」を過ぎると「円城ふるさと村入り口」という看板が目につく。傾斜の急な道を丘の上まで上っていくと、本宮山円城寺参道にたどりつく。

「天台宗本宮山観音院圓城寺」は七一五年行基菩薩開祖と伝えられる古刹である。もとは本宮山頂にあり、正法寺と号していたが、鎌倉中期に大火に遭い現在の地に移って円城寺と改称されている。徳川時代には備前藩主池田侯より寺領二十石が付与せられ、本堂正面に掛かる山号の扁額は備前藩主池田治正公の筆である。客殿には池田家の使者を迎える大名玄関が残っている。現在の本堂は、一八三三年（天保四年）大火に遭い一八四六年（弘化三年）当時数々の名刹を手掛けた宮大工田淵家の棟梁、田淵勝芳の手により再建された。また、桁上等の見事な彫刻は、その息子である「邑久郡宿毛村、田淵栄造源勝永」の作である。本尊は千手観音菩薩像、三十三年に一度開扉供養が行われる秘仏である。

境内には　弁財天を祀った堤婆宮があり、本殿は本堂と同じく弘化三年再建、棟梁田淵勝芳の作で、広く民間信仰を集めている。また、画家岸田劉生の父でもあり日本で最初の日刊新聞を創刊したジャーナリストの草分けでもある岸田吟香の落書きが残されている。

復元の発端

円城寺本堂は内陣・外陣とも格天井で、一格子間ごとに極彩色の絵がはめてあり、多くは花、ごく少数の鳥、動物の図があり一枚ごとに奉納寄進者が記入されている。季節によって深い霧に包まれる本堂は、外気にさらされている外陣の天井画の剥落が進んでいた。２０１５年の開山千三百年にあたり、傷みの激しい外陣天井画１６１枚の修復ができないかというご相談をいただいた。円城の地は戦前まで門前町として大いに栄えていたが、戦後は過疎化が進み、近年は地域をあげて活性化に取り組んでいる。江戸期の天井画を蘇らせることで参拝者が増え、地域活性化の一助になればという住職のご意向であったように思われる。

制作メンバーについて

本会副理事長の小川尊一先生(岡山大学名誉教授)は寺院襖絵に取り組まれた実績があり(会報１５８号参照)、先生を中心に岡山大学特美卒業生と留学生の８人で取り組むこととなった。８人の内、小川尊一・松田和子・田中晶子・池上わかな・松尾紘子・ダバラガンとメンバーの６人が創元会に関与している者である。

復元の経過

○「修復」を探る

最初は「修復」ができないかというご相談であった。内陣には江戸期のものが色鮮やかに現存している。同じように江戸期のものがそのまま残せたらという思いがあったのだと思われる。

３、４枚天井から下ろして試してみることとした。雲母を使用し顔料を厚く塗ってあるが、剥落が進み下書きの墨線さえ消えかけている状態であった。埃を取り除こうとすると顔料が落ちてしまった。何より描かれている杉板がやせ細っており、殆どすぐにヒビが入って割れてしまった。日本画の専門家にも見てもらったが修復は技術的にも難しいし、当時の顔料に近いものを使用すると莫大な資金が必要と言われた。また、何が描かれているか判別の難しいものが多数あり、原板での修復は不可能と判断した。

○「復元」に向けての準備

まず材料の杉板の調達から始まった。約５０㎝四方、厚さ１・５㎝の杉板２００枚の調達は、円城寺より北部美咲町の古くからの檀家である製材会社が調達してくれることとなった。そこで製材したものを、岡山市の同じく檀家である建設会社が天井画用に切断、一枚々に木枠をかけて反り防止を施し、ゆっくりと乾燥させてくれた。この乾燥には約１年を費やし、担当者が状態を綿密に点検しながら作業を進めてくれた。江戸期と同じ質で、この大きさの杉板を多数揃えるのはなかなか難しいということが、あちこちの天井画を見て歩くうちにわかった。近隣の寺の中では大きなサイズであった。

暇をみつけては天井画を見て歩いた。特に同時期に田淵家が手掛けた寺に残っている天井画を探し、撮影させていただいた。円城寺の図柄とよく似たものが残っている寺の天井画は何度か見せていただき、参考にさせてもらった。新しく発注して設置した寺、四国金比羅宮・伊藤若冲の作品、四国八十八カ所の寺々、奄美・田中一村美術館にある天井画の作品、その他寺社に行けば天井画はないかと探し回った。多くの作品に出会うことが「復元」の力となった。

○図柄の復元

図柄復元のための作業を並行して始めた。本堂外陣の天井画を下ろすわけにはいかず、専門家に写真撮影をお願いし、これを基にパソコンで原寸大の下絵を制作した。しかし図柄の多くは何が描かれているか判別できない状態であった。残った線を手がかりに図鑑やパソコン検索での原図探しである。花の名前がわからず、理科の教員や生け花の先生に見ていただいたこともある。植物同好会や個人的に検索して下さる方にも協力を仰いだ。大根に食いついているネズミと共に描かれている図柄がわからない時、「大根食う」で大黒天、大黒様は槌を振って宝物を出すので、この図柄は七宝であろうと解釈したこともあった。また九官鳥が江戸期に日本にいたかという話に、江戸期に大名が飼っていたという記録があると小川先生から教えていただいたこともある。刀枕などは最初「虫」かと思っていたがわからずそのまま再現し、「天井画展」で専門の方から教えていただいた。あとで図柄から検索してみると刀枕とわかった。

困ったのは原画の方が明らかに間違っていると思える表現である。しかし図鑑を再現しているのではないので、できる限り原画の表現を尊重した。実物をスケッチしたものもある。それでも再現できないものも多数あり、その場合は内陣の図柄を使ったり、一部変更して使用したものもある。

この作業は最後まで続いた。皆で検討会をするのだが意見百出、なかなか分からずどう処理するか最後まで苦闘の連続であった。一番難しく一番長い時間を要した。

○杉板の下地処理

そり止め板のネジ釘を外し、板の両面にサンドペーパーをかける。表には再度目の細かいペーパーをかけ仕上げる。ヤニ止めのためエポキシシーラーで素地調整を施す。メンバーが集まって小川アトリエ内や庭に出て行うのだが、もうもうたる木地の粉塵とシンナーの匂いで、皆気分が悪くなりそうになる。とても一度ではできず、数回に分けて実施した。八月の暑い日、冬場の寒い日の作業は大変だった。腕肩腰の痛みを訴える者もいた。シーラーの２度塗りは夏は早く乾くので都合は良かったが、冬は反対で 作業の迅速化と広げる場所確保のため、乾燥棚を購入した。

○彩色について

何よりも湿気に強く色落ちしないということで、アクリル絵具を使用した。日光東照宮に使用している繧繝彩色絵具を２４色ホルベインに発注した。８人ができる限り同じ仕上がりにするため、混色をしない、絵具の濃度を一定にするなどの約束事を決めた。しかし混色をせずには描けず、それぞれの判断にまかせた。また、原画は岩絵具のため盛り上がって彩色しているが、アクリル絵具では不可能であった。繧繝彩色絵具はアクリルでは

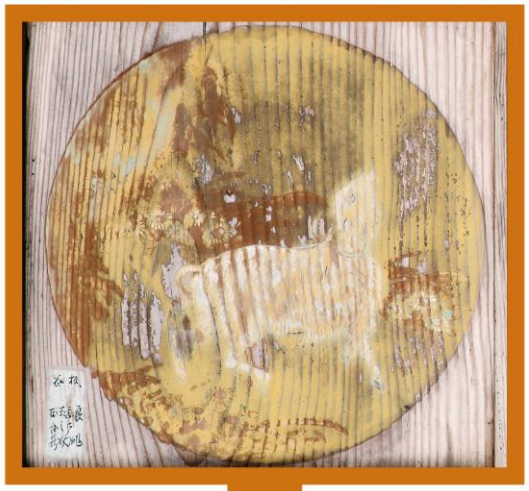
あっても落ち着いた色調で仕上げることができた。

天井画制作は各自が持ち帰って作業するのだが、途中の検討会は小川アトリエに集まって先生の指導を仰いだ。彩色の仕上がりを揃えるため、合宿制作も行った。最後はアトリエに外陣と同じ順番に並べ、彩色等の手直しを行った。この頃には皆、かなり疲労が重なっていた。

制作メンバーは自己の作品制作を行う絵描きである。しかしながら今回の仕事は江戸期職人の仕事を再現することであり、オリジナリティの追求はできない仕事であった。色と形を模索し続け、悪戦苦闘の連続であった。

完成した天井画には江戸時代と同じく、寄進者の名前を墨で書き入れ、最後に防水処理としてフッ素樹脂コートを施し、仕上げをした。

復元前



復元後

天井画修復展の開催

寄進者氏名を記入する前に、岡山県天神山文化プラザにおいて円城寺天井画修復展を開催した。取りかかり時は復元ではなく、修復を想定していて、プロジェクト名を「円城寺天井画修復会」としていたため、この名称を使用した。

地域への発信も交えたこの事業は、単に江戸期天井画の復元ということにとどまらず地域活性化の一助にもなりえたのではなかろうか。新聞各社にはカラー写真入りで大きく取り上げていただいた。また地元テレビ局も放映して下さり、連日大勢の入場者で賑わった。

落慶法要まで

外陣に取り付けるにあたり、天井の格子を新しくすることになった。格子はまだそれ程傷んでなかったので、江戸期のものをそのまま使用することになっていたが、やはり新しい方がいいだろうということで、急遽決まったようである。しかし、近隣ではこの大きさの木材は調達できず吉野あたりまで探したようであるが、鳥取県智頭町から調達した檜材と聞いている。自然乾燥では間に合わず、乾燥機も使用しての仕事であったようだ。

取り付けは寺社建築を多く手がけている檀家の工務店で、手慣れた様子で取り付けて下さったが、取り付けだけで三日を要した。一枚一枚取り付けられ、外陣が埋まっていく様子は、新しい空間が生まれていくようでとても楽しみであり嬉しかった。作業の様子はテレビで放映され、皆が期待して下さり、完成を待っていて下さる様子が伺えた。

落慶法要の当日は「晴れの国岡山」に似合わず、大雨の台風であった。檀家の方たちが

境内にテントを張り、五色の吹き流しを上げ、紅白の幕を張り巡らし、外陣天井下には白い幕でお披露目を待っていた。しかし激しい風雨で、外陣で法要を待っていて下さった方々にも雨が降り込む荒天であった。その中で、小川先生を初め制作メンバーも参加して、法要が営まれ、読経の後、住職より感謝状をいただいた。また本堂には制作メンバーの紹介パネルと作品も展示された。

雨が降るのは「降り込む」と言って、そこに深く根付くという意味で「吉兆」なのだと住職は言われていたが、翌日からは前日の風雨が嘘のように晴れ渡り、一週間特別公開の本堂は連日大勢の参拝客で賑わった。

古い本堂に新しい天井画は違和感がありはしないかと心配していたが、見事にマッチして清々しい空間が生まれている。本堂前に制作メンバーの氏名を記した墨痕鮮やかな棟板が置かれていた。お披露目が済めばこの板は本堂天井裏に上げられる。この板を次に見て下さるのは何十年何百年後であろうか。我々はもういないが、棟板の名前とこの天井画は時を刻んでいく。これからもそれに恥じない仕事をしなければと改めて感じた次第である。

復元経過の概略

数えて見れば計画から完成まで、足かけ八年を要していた。経過の概略を紹介したい。

平成十九年　秋　小川尊一先生らが現地視察、修復方法の検討に入る。しかし傷みが激しく、試行錯誤の後、原板での修復は不可能と判断し、新しい杉板での復元と決める。

平成二十年　五月　本堂建立の棟梁である田淵勝芳が手掛けた寺を中心に、県内外の天井画を見て歩き、参考資料を作成した。

平成二十年　十月　原画再生のため、本堂全ての天井画の写真撮影を行う。美咲町の製材所と岡山市の建設会社で天井画の杉板を作成。アクリル絵具（繧繝彩色）をホルベインに特注した。

平成二十一年一月　復元メンバーが決まり、全員が円城寺に参拝する。

三月　福武教育文化振興財団より文化活動助成が決まる。二十四年度までの四年間継続される。

四月　復元図を起こしはじめる。何が描かれているか判別できないものも多く、資料を探し検討会を重ねる。

八月　各メンバーの分担を決め、復元作業に入る。消えている部分の復元が難しく、他寺の作品を参考にしたり、現物をスケッチしたり、内陣の図柄を模写したものもあった。彩色については内陣の天井画を参考にした。

平成二十二年～二十三年　小川先生の指導を受けながら、各メンバーは担当した天井画の復元を進めていった。

平成二十四年七月　岡山県美作市東粟倉の民宿と「おもちゃ村」で制作合宿を行う。

十月　岡山市西大寺百花プラザで制作会を実施する。

平成二十五年十月　１６１枚の復元天井画が完成。

十二月　岡山県天神山文化プラザで「円城寺天井画修復展」を開催。多数の入場者があり、新聞各社やテレビ局を通じて報道された。

平成二十六年四月　寄進者の氏名記入作業を始める。

八月　天井画に防水加工を施す。

九月　天井画を本堂外陣に取り付ける。

十月　落慶法要が行われる。

開山１３００年を迎えるにあたって　（天井画修復展パンフレットより）

円城寺住職　天艸　眞諦

古来、寺院は僧侶の修行の場であった。やがて仏教の大衆化と共に、それは民衆教化の拠点という意味を持つようになった。「荘厳」（寺院等の装飾を意味する）は、もちろん先ず第一に、仏に対する御供の意であるが、第二には、そこに参る人々がその美しさに心を打たれることによって、仏の威光を高めるという意味を持つ。以前の世において、日常を我々の時代よりはるかに地味な色彩の中に暮らしていた人々が、寺院の荘厳に仏の世界を感得していただろうことは、想像に難くない。

当山、本堂外陣の天井画１６１枚が、１６０年の間にその色彩を失い、かろうじて描線が判読できるばかりのものになったのは、いつ頃のことだっただろうか。諸般の事情からあきらめていた天井画の「修復」が、仏縁をいただいて、小川尊一先生の御厚情によって実現可能となったのは、今より5年ばかり前のことであった。

その後の経緯により、原画を模写することによって、「復元」という形をとることになったのだが、そのことは先生をはじめとするスタッフの方々が、江戸期の天井画に現代的な意味を見い出し、そこに現代の「解釈」をこめて、再度本堂外陣を荘厳して下さったものだと言えよう。

「平成の復元」は当山にとってのみでなく、広く、ありがたく、意義深いものだと信じている。

天井画復元を終えて　（復元図録より抜粋）

小川　尊一

天台宗格天井にみる天井画が何を意味するかは、天艸住職のお言葉「荘厳」と「極楽浄土」で理解したが、歴史的にどういった人達で描かれてきたかが今一つ解らない。天井画に関する論文も明治の頃に、「日本建築に於ける天井画の変遷」というのが一編あるが、文中ではあまり重要視されていない。仏画師、襖絵師と同じように天井画師とはいかないようである。私の友人の父が昭和３０年代まで看板業に就いており、看板や商店の広告等に加え天井画も手仕事で請け負っていた。また、近隣のお寺に同じデザインの天井画を多々見ることからも、天井画は専門の絵師ではなく名もなき職人によるものと見るのが妥当と結論づけた。この事がかえって興味深く、純粋に職人としての技量の確かさを見ることができた。図柄は引き継がれた一つのパターンがあり、その手本帳をみながら泥絵の具という安価な塗料ではあるが天然顔料を膠で融いて活き良く描かれている。図柄が足らなくなれば、同じデザインで色を変えたり、向きを変えたり、中には他のデザインの一部を加えたりして数を増やしている。

何はともあれ、現物から受ける迫力は我々のか細い感覚では到底かなわない。がしかしご住職はむろんのこと、どこのお寺さんも希望は「常若」である。風化剥落が日本人の心を虜にした時期が未だあるにせよ、これらを全て取り除きアクリルという現代の塗料で対等に迫る域までスタッフ一同懸命に取り組んでくれた事に感謝申し上げたい。

重ねて幾多の檀家さんのご協力に心より御礼申し上げます。

おわりに

円城ふるさと村は、現代の喧噪からはかけ離れたかのような時間を過ごしているように見える。その村の小高い丘の上に静かに佇む円城寺も、また静謐な時が過ぎている。しかし今も昔も「生きる」という営みに苦しみは付きものであろう。天井画の下に佇み、ほんの少しでも何か癒やされるものに出逢って欲しいと願うのは、制作者の欲が深すぎるであろうか。

もしご縁があれば山里に足を運んで、天井画をみていただければこの上ない幸せです。

＊本宮山円城寺　〒709 － 2412　岡山県加賀郡吉備中央町円城７４２

TEL 0867・34・0004　　www. enjouji. net

以上